

中国の社会学について

星 明

I

われわれ社会学科の8名で「京都佛教大学社会学者訪華団」を組織して、昭和60年4月26日から5月4日までの9日間、中華人民共和国の北京、西安、上海の三つの都市を訪問してきた。北京では中国社会科学院の社会学研究所、北京大学社会学系の先生方と、また上海では上海社会科学院の宗教研究所の先生方や社会学者と学術交流会をもつことができた。

近年、特に無産階級文化大革命以後、また、1979年3月の社会学の復活以後、日本では中国の社会学者との交流や中国社会学の研究、中国の社会学的研究が活発になってきている。たとえば、中国の社会学の制度、基本的性格、研究内容の紹介は言うに及ばず、中国の社会や集団・組織を対象にした研究もあるし、さらには中国の大学で社会学を研究した者もいる。実際、社会学関係の雑誌や日本社会学会大会の研究発表などにも中国に関するものがみられる。

ここでは、これらの成果を参照しつつ筆者が交流会を通して得られた中国の社会学の概要を述べたい。

II

中国に社会学が成立したのは、^{イエンフー} 嚴復¹⁾ がH. スペンサーの The Study of Sociology を1903年に『羣学肆言』として翻訳してからのことであるといわれる²⁾。しかし、実際には1890年代にヨーロッパから伝わっていたようである³⁾。

中国の社会学の歴史は、清朝末期に成立してから今日までの約85年間政治=社会の変動と専ら連動していた。このことの最も大きなあらわれは、1952年に大学の社会学科が廃止され、続いて1957年の反右派闘争で、社会学はブルジョア科学であり、史的唯物論で事足りるという理由で学問それ自体が取り消されたことである。ソ連における社会学の否定的評価とソ連からの圧力もかかわっていたであろう。1949年10月1日、中華人民共和国の成立は、解放以前の学問の在り方に大きなインパクトを与えたが、社会学を取りまく事情はつぎのようである。

^{フエイシツオトン} 費孝通(1910～)の1950年の論文「社会学科をどう改造するか」⁴⁾によれば、1949年に大学専門学校教育会議にあたって配布された法文学部講座の改革法案の中には社会学科について、その他の社会科学のように分科列举がなく、原則的な指示がなされているだけである。そのために、これまでいろいろな推測がおこり、はなはだしいのになると、社会学科はまもなく解消されるのではなかろうかとまで考えられた。こういった状況に対して費孝通らは、マルクス・レーニン主義のもとで社会学はなお存在しうるであろうかという問題を検討した。その結論をまとめると、

- (1) 社会科学の基礎は、マルクス・レーニン主義である。
- (2) マルクス・レーニン主義を共通の基礎にして、これまでの政治学、経済学、歴史学、社会学などは社会科学部として統合される

べきである。

- (3) これまでの学科は、社会科学部の中の一つの専門となる。
- (4) 社会学科の主な講座は、社会科学部の基礎的な講座となる。
- (5) 社会学科の講座の三つの柱は、①マルクス・レーニン主義の理論講座、②文化的技術講座（外国語、統計、文章表現、調査、中国史、外国史）、③専門的業務講座（一般的な準備講座と専門的な業務講座の二つに分けられる。たとえば、都市を研究するばあい、準備講座とは工業化問題、資本問題、ロシアの資本主義発達史などで、専門的業務とは保険、戸籍、協同化、救済などである）とする。

こういった結論が出されたにもかかわらず、社会学は中国から27年間消えてしまったのである。

III

中国の社会学の復活は、1979年3月15日から18日にかけて北京で開催された社会学者座談会をもってである。

中国共産党の機関紙「人民日報」(1979年3月21日付)は、中国で社会学研究会が成立し、中国社会科学院が社会学研究所を設立することを報じた。この記事で中心に取りあげられているのは中国社会科学院院長の胡喬木^{フーヂャオムー}の言葉である。かれの言葉は、中国における社会学の特徴を基本的にあらわし、規定していると考えられる。というのも、かれは現代中国の最高権力者である鄧小平^{トンシヤオピン}の理論秘書といわれる人物であり、現在、中国共産党の最高の指導機関である中央政治局（現在、委員20人、候補2人）の一委員であるからである。

かれは副院長の于光遠^{ユグアングアユアン}とともに出席したので

あるが、社会学についてつぎのように述べている。

社会学が一つの科学であるという議論を否定し、粗暴な方法を用いてこの科学の存在および発展を禁止したことは誤りであった。そして、かれは史的唯物論であるマルクス主義が社会生活、社会現象、社会発展を研究するにあたって、広い範囲にわたって基本的な観点、原理および方法を提供してきたことを強調している。しかし、かれは史的唯物論が他の社会科学に代替できるものではないとしている。個々の社会科学はまだ専門に研究される必要がある。社会学は実際の問題、理論的問題、また中国の当面する社会問題そして外国の社会問題など非常に多くのことを研究する必要がある。しかし、これらのなかで焦眉の急であり、かつ最も重要なのは実際問題の研究であると述べている。また、かれは席上、中国社会科学院が社会学研究所の成立を決定したことを述べ、条件の整った大学が社会学系を設立することを希望するとも述べた。そして、かれは中国の社会学研究が発展するよう、また研究に努力するよう出席者を激励した。

3月15日から18日まで開かれたこの社会学者座談会では、社会学研究会工作条例（草案）が討議採決され、今後の活動方針と計画が定められた。また、社会学研究会会長に費孝通、副会長に田汝康、杜任之、陳道、李正文、羅青、林耀華、雷潔瓊らが選ばれ、理事30人余が選ばれた。また、顧問には陳翰笙、吳文藻（費孝通の学部出身校燕京大学での指導教授）、李景漢、洪謙、吳沢霖、言心哲、柯象峰、李安宅らが招聘された。

IV

中国社会学研究会会長費孝通（1910年生、現在人民政治協商会議全国委員会副主席、中央民

族学院教授、北京大学、南開大学、上海大学、南京大学の兼任教授)⁵⁾は、中国の社会学についてこれまで多くを語ってきている。かれの論文をみることによって、中国の社会学の性格をみてみよう。

費孝通は、1950年の論文「社会学科をどう改造するか」のなかで、コント、デュルケム、ル・プレーの社会学を正統派としたうえで、かれらの社会学はいずれも、階級的視点を欠如した唯心論的立場であり、資本主義社会下で発生した不合理な現象を根本的に解決できない改良主義の性格をもつとした。アメリカに伝わった社会学も、改良主義の社会学、社会事業の社会学であり、ブルジョアジーに利用されたとした。(このような欧米の資本主義社会における社会学を批判したにもかかわらず、1952年に社会学が大学の講座からはずされ、かれ自身も1957年に反右派闘争で批判され失脚した。「百家斉放、百家争鳴」へのかかわりから、科学院を中心とする学術界の反右派闘争の主要な対象の一人とされたのである。かれの1957年の論文「開弦弓村再訪——一九五七年——」は、新中国の農村を蔑み、合作社運動を破壊して、農民を国家・党と対立させ、ブルジョア社会学の基礎を樹立して、帝国主義に情報を提供しようとした——この調査に同行したある人物は、この記録は外国に開弦弓村のその後と現状を伝える目的で書かれたのだと述べた——悪質な政治的文書だとまで、こきおろされた。)⁶⁾

かれは、解放前の中国の社会学の性格についてつぎのように述べている。「中国社会学は、きわめて複雑なものであり、ヨーロッパの各派社会学説をもちこみ、紹介する以外に、実際とむすびついていて、おもに二つの方向にすすんでいった。すなわち、一つには、外国の寄付金でなされる社会事業であり、もう一つは、社会

の病的状態についてなされた社会調査である。前者はたやすく買弁意識を取入れる方向にかたより、後者は、おもに空想的社会主義にちかづいたが、さらに科学的社会主義にもちかづき、社会の現状にたいしては、だいたいに批判的となり、したがってまた、たやすく民主運動とも結合して、革命の大潮流のもとでは、進歩のがわにあるものであった。…(中略)…社会学は、調査研究に、おもきをおいたので、おのずから、具体的な実際と接触する機会も多く、接触面もまたひろかった。その結果、社会学の内容は、容易に中国化するようになった。中国の社会現象をもちいて、社会学の講義材料にするようになってから、各大学は、すくなくとも、十余年の歴史をすでにもっている」⁷⁾また、解放後の社会学のあり方について「社会学が徹底的に改造されたならば、それは必ず完全な科学的社会学、すなわち、マルクス・レーニン主義でなければならない。その点、その他の社会科学もこれと同じであるから、最後には必然的に合併されるべきものであり、すくなくとも、基本的なマルクス・レーニン主義の学習という点においては、統一されるべきものである」⁸⁾と述べている。

つぎのかれの叙述は、中国の社会学の現状および課題を最もよくあらわしているので、長文だが紹介しておこう。

「四人組が失脚すると文化大革命にも終止符がうたれ、10年にわたった混乱の時代もおわりを告げることになった。文革中に生じてしまったさまざまな歪みは、1978年の三中全会によって是正され、その後間もなく、私は社会科学院で働くことになった。そこでの私の仕事は、社会学教育を復活させ、それを組織していくことであった。それまで20年以上にわたって中国の大学では社会学を教えることが中止されていた

のである。私のこの新しい任務は決して容易なものではなかったが、中国自身の社会学を發展させたいという若い頃の願望をかなえるチャンスを与えてくれるものであったので、この仕事に私は非常に大きなやりがいを感じた。いまや、中国の真実の姿を映し出すことができ、社会主義の大義にもかなうような社会主義社会学を中国に發展させるべき時となったのである。現在ではこのような社会学は、近代化計画の推行を助けるとともに、中国の実情にそぐわないような政策が、今後採用されることのないようにすることにも役立つであろう。中国の現在の指導者たちも、これまで中国の実情に対する我々の理解が極めて不十分なものであったために、政策が首尾一貫せず、社会が不安定なものになったのだと繰り返して述べている。

中国の新しい社会学は、中国社会の現実のなかから生まれでたものでなければならず、また客観的な観察によって社会發展の根本的な法則を分析するものでなければならぬ。中国經濟を効率的に發展させていくことの重要性は、いまや誰もが認識している。しかし、經濟の發展は經濟的要因以外のさまざまな要因によっても大きく左右されるものであるということは、まだ必ずしも十分に認識されていない。たとえば、舅や姑との関係がうまくいかなければ、嫁は自分の仕事に心から打ちこむことはできないであろう。また、もし家族のうちの誰かが病気で寝こんでいたら、人は自分の仕事に心を集中させることはできないであろう。經濟的な活動というものは、現実にはこのような無数の非經濟的な社会的要因と密接にかかわりあっているのである。中国の社会学の課題の一つは、これらの社会的要因が互いにどのように影響しあっているのかを明らかにすることである。中国の社会学がこうした課題にこたえていくために

は、新旧、また洋の東西を問わず、我々の社会主義建設に役立つ知識ならば、どんな分野からでもとりいれていくことが必要であろう。

我々のまず最初にやるべき仕事は、まじめで現実的であるだけでなく、民衆の間にはいっていき、彼らの利益のためにつくすことを願う高度の知識をもった専門家を養成することである。中国の人口の80%以上が農村部に住んでいるのであるから、我々は私の姉のように、農民の福利向上を自らの喜びとし、自分たちが身につけた近代科学の知識を農村の生活改善のために捧げることでできる専門家を養成しなければならないのである。このような専門家が何人も育ってくることによって、さまざまな社会的要因の複雑な相互関係を解明し、その調査結果が政策決定の拠りどころとなりうるような、体系的かつ継続的なフィールド調査を行なうための基地を現地に設定することが可能になる」⁹⁾。

つぎに、上海社会科学院が月刊で発行している『社会科学』¹⁰⁾の1984年の社会学関係の論文から、社会学研究の動向の一端をみておこう。社会学理論(4編)では宋書偉「社会学を再建するにあたってのいくつかの理論的問題」、嚴^{イエン}^{デヤミン}「社会主義社会学の研究方法論管見」、孟^{モン}還^{ホアン}「中国の特色をもつ社会主義社会学の建設」、^{ルーハンロン}盧漢龍「全体社会を研究する社会学について」があり、社会調査および社会問題(13編)では共產主義青年団安徽省委青農調査組「安徽省における青年農民の現状調査」、^{スンホエミン}孫惠民「上海市中学卒業生の就業養成の情况」、^{ワンシェンミヤオ}王賢森「特色ある旧上海婚俗について」、^{ヤンシウ}楊舒「我国人口の文化素質について」、^{ヤンリツワン}揚利川「新しい人格を召喚する改革について」、^{ユアンツワンデ}袁占制「社会主義における婚姻の道德的基礎」、^{シェイミイアオファ}許妙瑛らの「上海市における家庭教育現状の考察」、^{ワングオチオン}王国城らの「思想教育を企業改革に採り入れること」、^{ディンウエン}丁文らの「愛情につ

いて」などがある。

V

つぎに、1984年に多くの大学や研究機関の研究者の共同執筆によって出版された『社会学概論』の章節構成の紹介を以下にしておきたい。

これらの章目をわが国の代表的な社会学のテキストのいくつかと比較したばあい、中国の社会学の性格がよくわかるであろう。

『社会学概論』・目次

第1章 社会学の対象と任務

第1節 社会学とは何か

第2節 何のために社会学を研究するか

第3節 いかに社会学を研究するか

第2章 社会およびその発展の条件

第1節 社会とは何か

第2節 社会の物質生活の条件

第3節 社会的精神生活の条件

第3章 人間の社会化

第1節 社会化と社会化の条件

第2節 社会化の内容

第3節 社会化の過程

第4節 社会化と個性の発展

第4章 第一次集団

第1節 社会集団

第2節 第一次集団

第3節 主要第一次集団

第5章 社会組織

第1節 社会組織とは何か

第2節 組織目標の分析

第3節 組織の管理

第6章 階級と階層

第1節 社会階級

第2節 社会階層

第3節 社会移動

第7章 社会制度

第1節 社会制度の含意と特性

第2節 社会制度の種類と構成

第3節 社会制度の機能

第4節 我国の社会主義制度とその優越性

第8章 社会統制

第1節 社会統制とは何か

第2節 社会統制の形式

第3節 社会世論

第4節 犯罪と社会統制

第9章 コミュニティ

第1節 コミュニティの概述

第2節 農村

第3節 都市

第4節 都鄙関係と未来のコミュニティ

第10章 社会変動

第1節 社会変動の意義

第2節 社会各方面の変動とその根源

第3節 社会変動の二つの主要な形式 ——進化と革命——

第11章 近代化

第1節 近代化の実践と理論

第2節 発達した資本主義国家の生産力の 発展が社会生活の各領域に与える 影響

第3節 我国社会主義近代化の目標と任務

第12章 社会問題

第1節 社会問題の概述

第2節 人口問題

第3節 労働就職問題

第4節 青少年犯罪問題

第13章 社会事業

第1節 社会事業とは何か

第2節 社会事業の内容

第3節 社会事業の沿革と新中国社会工作 の成就と特徴

第14章 社会学の研究方法

第1節 社会学の研究方法の意義と特徴

第2節 社会学研究の方法論

第3節 社会学研究の具体的方法

第4節 社会学研究の手続き

付録 社会学の由来と発展

1. 西洋社会学の産生と形成（1837年から1930年代まで）

2. 現在の社会学の発展（1940年代から今日まで）

VI

これまで、中国の社会学について述べてきたが、文字通り筆者の「^{バハ マ カンフウア}跑馬看花」であるが、結びとして、中国の社会学の特色をつぎのようにまとめてみたい。

(1) 1952年から1979年まで27年間中断されたこと。

(2) マルクス・レーニン主義、毛沢東思想に指導されていること。

(3) 四つの近代化（農業、工業、国防、科学技術）に貢献すること。

(4) マルクス・レーニン主義に還元されるものではなく、社会学個有の研究方法与対象をもっていること。

(5) 社会学の人材および教材の不足。

(6) 中国の抱える社会問題に答えること。

(7) 中国の特色をもつ社会学をつくること。

以上、大雑把に7つあげたが、戦争、国共内戦、半植民地、半封建制、大学制度、社会主義、プロ文革などとの関連のなかで、社会学をみななければならないと思っている。

最後に、中国社会学史年表を作成しておく。

（中文の邦訳は、本学留学生圓輝氏から助言をいただいた。記して感謝申し上げます。）

中国社会学史年表

1890年代 ヨーロッパから社会学伝わる

1903 嚴復（1853～1921）が、H. スペンサー（H. ス賓塞）の The Study of Sociology（1873）を訳す。『羣学肆言』

1908 我国有の大学并設社会学の課程

1919 名称「羣学」から「社会学」へ

1920年代中期 我国进而又有一批大学設立了社会学系

1923 梁啓超・陶孟和『Village and Town Life in China』

1927 中国社会学社社会学の専門誌『社会学刊』を刊行（1932まで）

？ 孫本文（1892～）『社会学原理』

？ 燕京大学社会学社会服務系『社会学界』

1929 李景漢『北平郊外之鄉村家庭』

1930 中国社会学会也成立了

1933 李景漢『定県社会概況調査』

1935 言心哲『鄉村家庭調査』

1934 陳翰笙『広東農村生産関係と生産力』

1936 “ 『Agrarian Problems in Southern-most China』

1939 費孝通（1910～）『Peasant Life in China』（Routledge）

1942 柴樹藩・于光遠・彭平『綏徳米脂土地問題初步研究』（1948重版）

1944 費孝通・張子毅『Earthbound China』（Chicago U. P.）

1944 費孝通他『China Enters the Machine Age』（Harvard U. P.）

1947 費孝通『生育制度』

1948 費孝通「中国社会学の発展」（『社会学研究』，Vol. 1. No. 3）

1949 大学専門学校教育會議，法文学部講座の改革法案（1954）

1950 費孝通「大学的改造」（『社会学評論』Vol. 5. No. 1）

1949頃 前後設有社会学系和設置社会学課程の大学有37所，教授，副教授，講師143人，毎年培养学生逾千人。

1952 社会学という学科は大学において中断（1979復活）

1953以降 社会学の学生招収中止
 1957 反右派闘争で批判され、社会学抹殺される。
 1957.8. 費孝通、反右派闘争で批判され失脚（'59年12月まで）
 1979 3/15～18、北京で社会学座談会開催され、「中国社会学研究会」発足（会長費孝通）、中国社会科学院長胡喬木、副院長于光遠も出席。出席の社会学関係者約60人。
 1979.9. 上海市社会学学会発足（会員約210名）
 1980 中国社会科学院社会学研究所設立（費孝通所長、研究員20人）
 上海社会科学院社会学研究所設立（黄彩英所長、研究員20人）
 ハルビン市社会学学会発足（80.6）
 ハルビン社会科学研究所に社会学研究室開設（80.6）
 湖北省で社会学会が成立し、社会学研究所がつくられた（80.11）

复旦大学分校に社会学系設置される。（今年招収新生30名）（主任 袁緝輝副教授、専任教員18人）学生 134名。

1981 南開大学に社会学專業班設けられる。（81.3）
 1981 北京大学国際政治系に社会学專業設置される
 研究生第1次招収5人
 天津市社会学学会発足（81.3）
 北京市社会学学会発足（81.8）会長雷潔瓊（北京市副市長）
 費孝通『民族与社会』（人民出版社）
 1981.10. 复旦大学分校『社会』Society (Sociological Journal) を創刊（81.10）
 1982 北京大学社会学系成立。研究生7人入学。
 主任 袁方教授、副教授1名、講師4名
 1983 北京大学社会学系第1次本科生招収31名。
 1984 北京大学社会学系、専任、兼任教師16人（教授3人、副教授3人、講師3人、助教7人）
 研究生26人。本科生招収30人。

〔註〕

- 1) 嚴復(1853～1921)は、H. スペンサーの著作以外につぎのような翻訳をしている。(B. I. シュウォルトツ、1964, In Search of Wealth and Power: Yen Fu and The West, 平野健一郎訳、1978, 『中国近代化と知識人—嚴復と西洋—』, 東京大学出版会, p.282 参照)
 T. H. ハックスレー, 『進化と倫理』
 A. スミス, 『国富論』
 E. ジェンクス, 『政治通史』
 J. S. ミル, 『自由論』
 C. L. モンテスキュー, 『法の精神』
 W. S. ジョバンズ, 『論理学』
 J. S. ミル, 『論理学』
- 2) 福武直, 1979, 『中国の社会学とその復活』, 『社会学評論』, Vol. 30, No. 2, p. 60.
- 3) 《社会学概論》編写組, 1984, 『社会学概論』, 天津人民出版社, p. 397.
- 4) 費孝通, 1950, 「社会学科をどう改造するか」(原題不明), 『大学の改造』所収, 高浜介二・道満悦子共訳, 1954, 「社会学科をどう改造するか」, 『社会学評論』, 17号, pp. 89～97.
- 5) 費孝通, 1947(1981再版), 『生育制度』, 横山広子訳, 1985, 『生育制度—中国の家族と社会—』, 東京大学出版会, 解説(p.339)から。
- 6) 費孝通, 1983, Chinese Village Close-Up, 小

島晋吾ほか訳, 1985, 『中国農村の細密画—ある村の記録 1936～1982—』, 研文出版の訳者あとがき(p.342)から。

- 7) 費孝通, 1950, 前掲論文, p. 91.
- 8) 費孝通, 同上, p. 93.
- 9) 費孝通, 1983, 前掲訳書, pp. 17～18.
- 10) 『社会科学』は「政治」, 「経済」, 「哲学」, 「法学」, 「社会学」, 「宗教」, 「歴史」, 「文学」, 「科学」, 教育体制改革及其他」の論文から構成されている。

〔文献〕

- 1) 薛素珍, 1980, 『社会科学』(上海社会科学院), No. 5, の社会学についての読者への回答から(p. 154)。
- 2) 福永安祥, 1982, 「中国の大学と社会学」, 『めいせい』, Vol. 16, No. 5, 明星大学出版部。
- 3) 中野卓・蓮見音彦, 1982, 「中国社会学の現状—費孝通氏に聞く—」, 『社会学評論』Vol. 33, No. 2.
- 4) 福武直, 1982, 「復活後の中国社会学」, 『社会学評論』, Vol. 33, No. 2.
- 5) 福武直, 1985, 「中国社会学界との交流」, 『U P』, 155号。
- 6) 筆谷総, 1979, 『中国現代化における社会学の拾

頭について」、『研究所報』（佛教大学社会学研究所），第3号。

7) 筆谷稔，1980，「中国現代化の問題」，『現象とし

ての組織社会』，世界思想社，pp. 175～197.

8) 筆谷稔，1981，「中国における研究交流」，『現代社会論の基礎』，世界思想社，pp. 143～149.